# 平成 13 年の病害虫発生状況

H13. 12 月
熊本県病害虫防除所

本年は、全国的な暖冬で幕を開け、春から秋にかけて梅雨期以外は天候に恵まれたことから、全般的に作物の生育は順調で、病気の発生は少なく、害虫の発生がやや多く認められた。

病害では早植え水稲のいもち病や普通期水稲のもみ枯細菌病、害虫では、イグサシンムシガや果樹のカメムシ類、野菜・花き類のオオタバコガなどが注目された。

**【 水稲 】**

七月以降、早植水稲ではいもち病の好適条件の出現により、葉いもちの発生が山間部で多くなり、穂いもちの発生が懸念されたため、早植水稲を対象に、発生予察注意報（注意報第２号8月１０日）が発令された。その後は、防除の徹底や好天に恵まれたことなどから、発生は平年並に落ち着いた。普通期水稲では、出穂期の８月下旬以降に降水量がやや多くなったことから、もみ枯細菌病や内穎褐変病の発生が増加した。

害虫では、セジロ・トビイロウンカの飛来回数は平年並であったが、飛来量が例年になく少なかったため、発生量も平年に比べて少なく推移した。コブノメイガの飛来量は平年並であった。斑点米カメムシは、予察灯による誘殺数や６月下旬のすくい取り調査では平年並の発生であったが、作期の混交している地域の早植栽培や早期水稲地帯では集中加害を受けやすく、休耕田や畦畔雑草の管理、あるいは防除の不徹底から、斑点米による等級格下げが多く問題となった。

**【 麦類 】**

全般的に病害虫の発生は平年並であった。赤かび病は、感染時期に胞子の飛散量がやや少なく、降雨日数も少なかったことから、平年より少ない発生となった。

**【 大豆 】**

べと病や葉焼病など、病害の発生は平年に比べてやや少なかったが、夏期の高温少雨を受けて、８月以降、コガネムシやハスモンヨトウの発生がやや多くなった。特にハスモンヨトウは８月上旬から白変葉が見られ、多発生が懸念された（技術情報8月１３日）が、防除の徹底などにより、９月下旬には平年並の発生となった。

**【 い草 】**

イグサシンムシガの越冬虫数が多く、多発生が懸念されたため、発生予察注意報（注意報第１号４月６日）が発令されたが、適期防除などにより、発生は平年並に落ち着いた。

【 果樹 】

病害では、カンキツにおいてそうか病の発生が梅雨期にやや多くなったが、その他は全般的に平年に比べやや少ない～平年並の発生状況であった。害虫では、県北のハウスミカンにおいてミカンキイロアザミウマの発生が多かった（技術情報６月６日）ほか、ミカンハダニやミカンサビダニの発生が、夏期の高温乾燥の影響でやや多く推移した。

カメムシ類は、スギ・ヒノキの毬果を餌として増殖するが、近年、毎年のように発生が多く、発生予察注意報が出されている。本年は、越冬量は少なかったが毬果が豊富であったため、８月下旬～９月に飛来量が急増し、一部のカキや極早生温州、早生温州などで被害が問題となった（技術情報9月１０日、注意報第3号9月２６日）。

【 茶 】

全体的に、病害は平年に比べやや少ない～平年並の発生であった。害虫では、近年クワシロカイガラムシの発生面積が増加している。本年も、発生時期がやや早く、5月と９月のふ化最盛時に少雨だったことからやや多発生となった。

【 野菜 】

春期は例年より気温が高かったため、イチゴのうどんこ病の発生がやや多くなった。イチゴでは、育苗期に萎黄病や炭疽病の発生が増加しており、問題となっている。また、トマトやミニトマトでは、昨年の秋以降に斑点病が発生して問題となったが、本年も発生が認められており、引き続き注意が必要である。

害虫は、夏期の高温・少雨の影響で全般的に発生が多く、オオタバコガやハスモンヨトウ、コナガ、ハダニ類、スリップス類、ハモグリバエ類が多く発生した。特に、夏期以降はオオタバコガの発生が多く、果菜類で被害がみられたため、発生予察注意報が発令された（技術情報８月２２日、注意報第4号１０月２２日）。

一昨年に初めて発生し、問題となっているトマト黄化葉巻病（ＴＹＬＣＶ）は、本年も９月以降に各地域で発生が増加した。特に、冬春トマトの主産地では対策会議がもたれ、技術資料を配布し、対策の徹底を周知した。トマト黄化葉巻病は、シルバーリーフコナジラミによって媒介されるウイルス病であり、コナジラミ防除や圃場周辺の雑草防除の不徹底、あるいは感染苗の持ち込みなどにより本圃で発生するため、今後ともこれらの点に注意する必要がある。